わんはげ小豆と子育て村

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一—

蔦谷　栄一（つたや　えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。

〔主な著書〕
「未来を耕す農的社会」「農的社会をひらく」「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）など

甘辛両刀遣いの筆者は、お酒はもちろんのこと、大福やまんじゅうにも目がなく、季節を問わずよく小豆を購入しては家であんこを作ってもらい、パンなどにもジャム代わりによくあんこを付けて食べる。

正月もすっかり終わって、2月も中旬に入った夜、外出先から戻ったところ、家内が「乾物の入った棚を片付けていたら、紙袋に入った『わんはげ小豆』が出てきたので、急きょ、赤飯を炊いてみたの。すごくうまいわよ」とのこと。早速賞味してみたところ、実に美味。しっかりした豆の味と香りに本物を実感し、すっかり魅了されてしまった。

袋には2021年産わんはげ小豆と書かれており、調べてみると、黒小豆とも、わんはげ小豆ともいわれるもの。日本で昔から作られてきた在来種の小豆の一つである貴重品。「あんこにすると、おわんをなめつくし、わんの塗りがはげてしまうくらいおいしい」ことから「わんはげ」と呼ばれているそうで、納得すると同時に、次は早く、あんこで食べたいと心底から思った次第。

「ところでこれはどうして手に入れたのかしら」との家内からの質問。あれこれ考えてみると、昨年の10月に、長野県伊那市高遠町にあるリンゴ農家である家内の実家に顔を出した際、器量が悪くて売りに出せないリンゴを1ケースほどもらって、同じ高遠町のトンネルを越えた向こうにある、子ども支援・子育て支援に関わるさまざまな活動に取り組んでいるＮＰＯフリーキッズ・ヴィレッジ（以下、フリーキッズ）に届けた際に、逆にお土産にもらってきたことを思い出した。

頂いた「わんはげ小豆」の袋

フリーキッズは04年にＮＰＯ法人化し、「1軒の古民家による寄宿生活塾時代の第1世代」を経て、「同じ集落の古民家に居を構える複数の自給自足をベースとした家族による『子育て村づくり』の第2世代」へと移行してきた活動の母体である。筆者もご縁を得て、第1世代の後半から理事を務め、現在は副理事長の任にあり、コロナ禍でこの2年ほどはなかなか足を運べずにいるが、できるだけ月1回は足を運び様子を把握しておくよう努めてきた。

理事長の宇津孝子さんをはじめ、同じ集落に移住してきた数家族は里親として子育てに当たっている。これと並行してフリーキッズでは、被虐待児や不登校・ひきこもりなどの生きづらさを抱えている子どもたちの受け入れを行う「おやまのおうち」、地元の子どもたちの居場所としての「みんなの村」、地域の要保護児童の家庭とつながる「ファミリーサポート」、山村留学などの各事業と併せて、自然農によって農産物を栽培・自給していく活動も展開している。

この自然農による自給の取り組みの一環として生産されたのがわんはげ小豆で、子どもたちも栽培を手伝ったものである。実は昨年末にフリーキッズのスタッフの皆さんから白毛もち米で作られた餅が届き、正月にお雑煮やお汁粉でいただいた。この白毛もち米の餅を、わんはげ小豆を使ったお汁粉で食べればよかったと思い付いたものの、後の祭り。ということではあるが、自然豊かな山里で元気に育つ子どもたちの姿を思い浮かべながらいただくあんこも楽しみだ。わんの塗りがはげないよう陶製の器を使って、あんこにきな粉をかけていただくことにしよう。